

美しきことのしづかに初蝶來

藤田湘子

永い人生の中で、何に喜びを感じるかは人それぞれである。ほんの些細なこと、毎年同じように巡り会うことでも、「佳きかな」と思えるだけで幸せになれるなら何物にも代えがたい。

俳人にとって、自分の好きな「季語」に巡り合うのは、つまり命の一瞬に立ち会うことに他ならない。

湘子にとっては、還暦までは「初蝶」が好ましい季語だったのだろう。全句集に十三句が残されている。

ところが、昭和六十二年発行の第八句集『黒』以降の句集には、「初蝶」の句は一句も残されて居ない。「蝶、揚羽蝶、鳳蝶、秋の蝶、凍蝶」などは、その後も詠まれて居るが、美は移ろいやすいものである。

1983年（55歳作）第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩